2 竪穴式石槨の発掘と遺物の出土 -1896 (明治29) 年

雲部車塚古墳(以下「車塚」)は、今から114年前の1896(明治29)年5月19日に発掘がおこなわれた。発掘後、「不敬」の回避を第一義とした明治人の努力によって、陵墓参考地に治定された。

車塚は、陵墓参考地にもかかわらず、考古学の研究対象になりうる稀有な例である。その理由としては、1)発掘直後に現状保存が図られ、その後の行政上の対応が速やかであったこと、2)車塚にかかわる関係機関の行政文書、新聞などの民間情報などが冊子として保存されたこと^{註1}、3)発掘後に多数の絵図面が作成され、容易に発掘結果が復元されること^{註2}、4)陵墓参考地に治定され、きわめて手厚い保護が図られたこと^{註3}、5)出土遺物が京都帝国大学に移置され、研究資料として保存されたこと「京都大学総合博物館1997」、などが考えられる。

ここでは、豊富に残された文献、描かれた絵図を渉猟し、中でも『車塚一蒔』^{註4} (第4図)、『兵庫県 多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願』(以下『御治定御願』) ^{註5}を基本文献として、車塚の発掘に至る経 緯と、結果について明らかにするものである。なお、今日における車塚の考古学的意味や出土遺物の詳 細なる分析については、第3章以下に委ねる。

(1) 発掘の遠因と動機

車塚は、江戸時代の地誌、『篠山領地誌』 #16によると、後円部を「車山」、前方部を「牛山」と呼び、2基の陪塚を「車塚」と呼んでいた。篠山藩城主、第4代松平若狭守康信の命により、承応から明暦年間 (1652~1657年) に、車塚の北濠を残し、東西南の濠を埋めて耕地とした。この耕地、すなわち田は、 除地として村の宮田となり、墳丘は村共有の草刈場、濠は溜池として利用されていた#17。

明治時代に入ると、1874 (明治7) 年11月、篠山川の堤防が洪水により損壊した。そのため東西の本荘村は修復する必要に迫られ、そこで東本荘村は、江戸時代から無税地である村有地 (共有地)、車塚および両側の陪塚を、村民15名に約75円で売却して費用を捻出した。ところが、翌年の1875 (明治8) 年、明治政府は地租改正をおこなったため、車塚は「墳墓地」
註8となり、私有地、有租地とされ、納税する義務が地権者となった村民に生じた。村民は墳丘を開墾して茶や桑木を植えて対処したが、さらに全域を

開墾して、桑茶椿を植栽したい旨、1886 (明治19) 年12月 29日「塚地開墾願」を県知事宛に提出した。しかし、県 より「許可難相成」の回答があり、開墾をあきらめ、植 えた樹木を抜き、牛馬の放飼場として利用していた^{註9}。

1896 (明治29) 年 5 月13日、当時、多紀郡 (現・篠山市) の政治・経済をリードしていた旧日置村の豪農、波部本 次郎氏註10 は、篠山へ帰郷していた東京大学理科大学 (現・東京大学理学部) 人類学教室に勤めていた、八木奘三郎氏 (以下「八木氏」) 註11 を旅館に訪ね、郡内の古跡を顕彰する気持ちをもって、車塚の調査を依頼した。

14日、波部氏の依頼に基づき、八木氏、雲部村村長木 戸勇助氏(以下「木戸村長」) ^{駐12}、総代木戸正寿郎氏の3 人が、車塚を見学した。



第4図 「車塚一蒔|

八木氏は、「塚は、普通諸地方にある瓢形の古墳にて、周囲の濠を鐃らし、其一部は猶水を堪へぬ、上部は雑草の生ずるのみにて、別に樹木なく、麓の辺には、点々埴輪片の存在するを見受けたり」と記し、「墳形を案じて、二千年前の墓制にて、御陵か、否らざれば、皇族方の墳墓ならん」と所見を述べた。このことを聞いた木戸村長、木戸正寿郎氏は、「二千年前后の御陵か、或は皇族方の墳墓なる旨申聞候に付き、果して然る時は、此侭に差措候では、不敬之至りと存し、(略)今般証跡を認めんと欲し、試掘為致候」と考え、5月19日、住民が村道づくりに集まった機会に、車塚を「試掘」註13して、皇族方の墳墓かどうかを確認しようとした。これが動機である。

(2) 発掘結果

①書かれた発掘結果

発掘の状況は、高家正一氏が著した「四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記」(以下「御陵墓顛末記」) 註14 か ら少し長いが引用すると、5月19日「木戸村長指揮監督の下に、村民八拾余名、手に手に大鍬鶴嘴等の 獲物を持て、先つ車塚の東の方より掘り始めたり、時に同日午前拾壱時なりしなり、拾貳時なるも何も 出ない、壱時になるも何も出ない、(略) ドンドン掘て行くと、此処彼処より素焼きの壷の片割れが、ゴ ロゴロと現れてきた。(略) 村民は、後の高い丘を掘り始めたるが、午後貳時過ぎ頃、頂上より少し南方 の所を掘り居りし、(略) 若衆 (萬やん) がこつんと石を掘り当てた。さあ出たと言って皆々一所に集って (略) 掘り出すと丁度畳四枚敷程の大きさと成て、真中に線があって破れているけれどもなかなか大きな 石である。(略) 再び獲物を取りて、石の端迄掘り終われば、一枚の石は畳を長く二枚続いたる位の大き さ約貳間で、幅三尺位で、厚さ一尺程あるべく、畳二枚形の石が幾枚も横に並び居る故奇異なる形を見 たる村民は、最早狂奔狂喜して、狂人同様である(略)(村民は)一番端なる一枚をこじ上げんと(略)エ イサ、エイサの掛け声諸共に、益々上げたれば遂に約一尺許り上がり、(略) 穴より中を覗き見るに、(略) 一種の臭気鼻を突きなかなか首を突込めない。光線でよく覗き見ると、黒牛の横寝の様だ。(略)(萬やん が)提灯を頼りに一尺ほどの間より、ストンと穴の中に入った。(略)深さは、一人前の男が立ち得る位 にして、東西に長くして一見六畳敷程の廣さで、牛と見えたるは一個の石棺にして、周囲には腐れる古 刀古剣古鎧の類が、稍規則的に囲繞してあり、暫くして萬やんが上がて来る。(略)身体一面に(略)赤 き朱が(略)付着して居るので誠成りと、物好きなる村人は、我も我もと代わる代わる入りて中を探検し、 這い上り来るが何れも多少朱の御土産を貰ひ来たれり、此の朱は、石棺の隙間よりにじみ出たるものに して、長い年月と共に穴一面に広がって居る。(略)」

この大騒ぎの最中に、「(略) 篠山警察署警部藤井近治、多紀郡書記林利幸の二人、郡内巡回の途次当所に来合わせ、協議の上人民の立寄らさる様竹にて柵を結び、且役場吏員及巡査をして厳重に保護せしめ(略)」と発掘の様子を臨場感あふれる文章で表現するとともに、警察署長や書記により、現状維持の措置がとられた。

翌日の5月20日、『車塚一蒔』によると、多紀郡長依藤忠夫氏、篠山警察署長藤井近治氏、木戸村長、世話掛一同が、立ち会いをして、「石蓋の上より石槨内を窺い見るに中央に石棺あり、朱を以て塗抹し、周囲に甲冑刀剣等」を確認するとともに、木戸村長は、多紀郡長依藤忠夫宛に、前述の発掘理由と結果、その後の措置について「後円部の中央より、南の所(地表面から)凡そ三尺許りの所に、切石の蓋あり、隙より窺見るに其巾凡六尺、深さ五尺許にして、長さ四間余も有之、其穴内は判然不仕候得共、小石を敷き、其上に甲冑刀相見え候に付、打驚き居る折柄、篠山警察署長警部藤井近治殿、多紀郡書記林利幸

殿、巡回相成候に付、事実上伸致、覆を為し、柵を二重に囲い、厳重に監護為致居候間、此後如何取斗ひ可然哉、実況図相添へ、御指揮奉仰候也」と記した「御伺書」を提出し、上級機関からの取り扱いの指示を仰いでいる。

6月12日、兵庫県警部長榊原以徳氏が、石槨内 の実地調査をおこなった。

そして、1897 (明治30) 年6月10日、宮内省諸 陵寮諸陵助藤田健氏(以下「藤田諸陵助」)が車塚な どの現地調査を実施した。『車塚一蒔』には、古 墳の保護と遺物の保存の指示を与えているが、車 塚の被葬者などについては何も記されていない。

第3表 「石槨内古器物ノ取調」

遺物名	1	2	3
	ほぼ形を 存するもの	1から石槨内 に戻したもの	1から京都大学 に移置したもの
刀	34 □	31 □	3 □
劔	8 🏻	4 □	4 □
鉾	2本	_	2本
鎧鉢	4個	2個	2個
鎧胴	5 個	4個	1個
矢尻	107個	100個	7個
長穂先	_	_	1個
刀掛	_	_	2個
石	_	_	2個

しかしながら、「御陵墓顛末記」に、藤田諸陵助が石槨内に入ったときの様子を述べているので引用する。

「宮内省諸陵寮より藤田健氏を雲部村に出張せしめ、実地を調査し、再び村民を召集して、蓋石を取らせ、自ら穴中に入りて、天井の蓋石を見ると、畳を長く二枚位の人造石が七枚、並びに穴の四方は人造石を以て積み上げ、底は卵の如き丸き海石を以って隙間なく敷き詰め、穴の深さ四尺九寸、東西一丈七尺三寸、南北五尺一寸、長方形になり、其真中に石棺が東西に横たわり、石棺は凡て人造石にて隙間よりは真紅の朱が一面にしみ出て、石棺の高さ三尺一寸、長さ七尺一寸、横三尺一寸、穴ありて棒を通して、檐ひ得るように形造り、上部の蓋は、瓦の如き盛り上がりたるものにて、若し蓋を取り得るものとすれば、(略)何人の皇族の玉体乃至は野人の遺骸か兔に角二千年前の昔の人が(略)静かに眠むり居らるならん。(略)

さて、人造石で積み上げられた四方の壁には、刀掛の様な鍵が打付て、鎗だとか刀とかの類が掛けられて有りしものなるも、何分年月を経たる為、其の多くは下へ崩れ落ちて不規則に打折れ累なり、或は半鍵に掛りながら重に金属製のもの許りであるが、殆ど赤く錆びて鍛冶屋も買わない様のもの許りであるが其中で略形を存して居る重なるも左の品々(第3表)とて、木戸村長は手控えを持ち来りて曰く」と。

6月19日、藤田諸陵助の指示によって、遺物の目録作成、点数確認、取り出し保存するもの、石槨内に戻すものの取捨選択をおこなった。

7月16日付、藤田諸陵助の書簡により、「石槨は堅く蓋をなし、十分に土を掩ひ、此後何人が考証実検の為、来り候共、開無之様致し」と指示し、その後、石室は覆土され、今日に至っている。

②描かれた発掘結果

車塚を描いた絵図面は多数残されている。しかしながら、篠山に残る、描かれた目的のわかる図面は、唯一『車塚一蒔』に綴じられた図面である。例えば、前述の「兵庫県警部長榊原以徳殿、実地調査相成たるに左図の如く看之」の左図とは、「石棺・石槨図」、「石棺図」、「槍・鉾・刀・剣・甲冑他図」であり、発掘直後に作成されていたと思われる。そのほか、「見取図」、「実測図」、「御陵墓参考地隍堀土堤築工等之図」など計14枚の絵図面が貼付されている。

また、「何人カノ筆ニ成ル見取図」と称される図面が、1935 (昭和10) 年5月まであったが、現在不明である。この見取図は、1935年5月、多紀郡町村長が宮内大臣に提出した『御陵墓参考地に関する御請願書』の付属資料として、多紀史蹟研究会が、『兵庫県多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願』を作成し



「車塚南見取図」(『御治定御願』付図)

彩色を施したものである。

た際、この中に、当時本郷大将記念図書館書記の中 山正二氏が、「何人カノ筆ニ成ル見取図」をもとに書 き写したものを手控えとして残している。中山氏が 各図面に「発掘當時 (明治二九年) ノ古図ヲ写ス | と 朱書きした図面、「車塚南見取図 | (第5図)、「蓋石図 |、 「石槨ニ石棺ノ入リタル図」(第58図)、「石棺之図」 (図版2)、「釼惣白石図 | (図版3-1)、「甲腐朽図 | (図版3-2)、「ホゾン物類図」、「車塚附近略図」の8 枚がある。いずれも縦27cm、横38cm、墨書きの上に

また、『御治定御願』の末尾に、「見取図ハ車塚発掘当時ニ何人カノ筆ニ成ル見取図ガ保存セラレアリ シヲ再録シタルモノニ候」と記している。今では石槨内の様子を知る貴重な見取図である。

このことから、これらの絵図面は、『車塚一蒔』の「石棺・石槨図」(第12図)、「石棺図」、「槍・鉾・ 刀・剣・甲冑他図 | (第11図) と同じ頃に作成されたと推定したい。

そのほか、多数の絵図面が、新聞、研究雑誌、研究書に掲載され、さらに郷土史の研究者によって模 写され、かつ描かれた内容を加除して独自の絵図面が描かれた〔池田2002〕。

絵図面から、車塚の発掘結果がどのようなものであったのか、探っていきたい。

A. 墳 丘

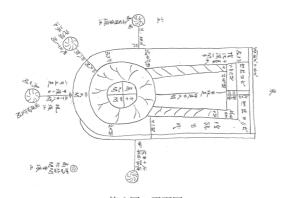
車塚および周辺を鳥瞰した絵図、「車塚南見取図」(第5図)がある。この絵図をみると、車塚の鞍部に、 陪塚車塚(い号)近くから続く里道が、北濠に向かい、後円部頂には、柵と小屋が描かれている。この木 柵の中が石槨である。鞍部の南北に、対称の位置に陪塚車塚があり、北側に鳥居塚2基が描かれている。 墳丘全体を描いたもっとも古い図面として、1769 (明和6) 年、永戸半兵衞貞著『丹波志』に平面図があ る。濠を埋めて田とした状況が描かれている。造出は存在しない。

2004 (平成16) 年に宮内庁書陵部が実施した事前調査によって、墳丘の長さ158m、後円部径104m、 前方部の長さ76m、前方部幅112mに復元された。墳丘は3段築成である〔徳田ほか2006〕。

B. 陪

現在、車塚の陪塚には、車の"両輪の如く"と表現された車塚2基と飯塚古墳1基の3基がある。

『車塚一蒔』には、陪塚を図示した絵図面2枚がある。1枚は、前述の『丹波志』の平面図(第6図)、 1枚は、1903 (明治36) 年4月21日、京都帝国大学の中山親和庶務課長宛に提出した、「外形平面図」で



第6図 平面図 (『車塚一蒔』に転載された『丹波志』の平面図)

ある。前者の図面は、車塚を中心として衛星的に 点在する陪塚、南から北に時計回りに車塚 (い号)、 車塚、牛塚(楓塚)、隔塚、車塚(ろ号)の5基が、 後者は、さらに外縁に位置する鳥居塚2基、縣守 塚1基の3基を描いている。

車塚 (い号・ろ号) い号・ろ号の陪塚は、『篠山 領地誌』に、車塚を牛の形とみて、車塚の前方部 を牛の頭、後円部を牛の後とし、両陪塚を車輪と みたて、牛が車を引くようだと書いている。

墳形は、い号は方墳、ろ号は円墳である。1899 (明治32) 年9月、陵墓参考地として買い上げに際し作成された実測図面によると、ともに墳形は方形を呈さず、円墳・方墳とはいいきれない。昭和50年代前半に撮影した写真をみると、ろ号を取り巻く水田区画は方形を呈し、周庭帯からのびる縁線が墳丘中央を横断する。古墳の基底面は円形を呈している。それに対し、い号は方形であり、基底面も方形を呈している。周庭帯は不明である。この両塚は、『車塚一蒔』には、1896 (明治29) 年5月22日、木戸村長が県庁へ行き、兵庫県書記官秋山恕郷氏、県警部長榊原以徳氏に発掘の状況を説明した際、所轄の警察署長立ち会いのもと、陪塚などの調査の指示を受け、調査を実施した。その結果、何も遺物は発見されなかったと報告している。6月16日、さらに「追伸書」を提出して、「該地を二・三尺発掘せしに刀剣等掘出せし事度々有之、且又自今二三尺発掘せしに、岩の形をなせる鉄塊の如きもの(俗にカナクソ)あり、但し其金質は判然せず」と記している。

隔塚および飯塚古墳 隔塚は、主墳からみて北西の位置に、墳丘裾から「一八間、廻三七間、隔塚と 伝、乾」と記述され、描かれている。しかし、現存しない。

飯塚古墳は、車塚の東西にのびる主軸線を西に延長すると、小山にあたる。その小山の頂上に築かれた円墳である。外形平面図には牛塚(楓塚)が同じ位置に描かれ、飯塚古墳は、図面上には描かれていない。『丹波志』には、「イ塚、同古跡(筆者註:車塚のこと)の西相去ること一五間に在、但、村東小山の南出崎也、北の方を穿ち隔つ故に塚の如し、只言伝るは御台所なりと。因て飯塚を略し呼ぶ」、『車塚一時』は、「隔塚、又は食塚と云う」、「車塚を距る拾五間の乾に當り(略)其形山にして頂上円く、館跡の形をなせる」と記している。図面と記述とに混乱が生じている。

車 塚 南西に位置するこの「車塚」は、図面に描かれているが、文献にもまったく記述なく、現 在存在しない。

鳥居塚 鳥居塚は、『丹波志』に「資方古跡 (筆者註:車塚のこと)の北相去こと五六間、田間に石二つ在り、其間一六間東に在。塚上に平大石二つ在、事故しれず」と、『車塚一蒔』には、「車塚を距る北方五六間字佐より八三二番外墳墓地 (略)字同所八四六番外墳墓地 (略)距離一六間、是れは鳥居塚と称する小丘に有之候」と記されている。現存していないが、存在した可能性も考えられる。

牛塚(楓塚) 牛塚は、車塚の西に位置し、墳丘裾から「西、楓塚と伝、三丁二八間、牛塚と伝、小円丘、周廻四三間、高さ四間」と記述されている。牛塚は、『車塚一蒔』の天満社の説明に「字中筋二二四番、官有地にして車塚を距る三町四○間の、西本村の中央にあり、明治改正以前は楓樹、又は姫塚とも云い」と記されている。姫塚は、車塚の西方にあり、一辺30m、高さ3mの方墳、姫塚古墳として周知されている。

C. 濠

「平面図」には、墳丘の北側に「隍池一間半」、東・南に「隍跡田成」の文字がみえる。江戸時代の承 応から明暦年間 (1652~1657年) に、車塚の東西南の濠を田としたことを証明する。

 $1903 \cdot 1904$ (明治 $36 \cdot 37$) 年、「御陵墓参考地隍堀土堤築工等之図」 115 によって施行され、もとの濠に復した。

D. 埴 輪

埴輪は、『丹波志』に「岡と池との間、岡の麓回りの水の滸に壺あり、各々焼底なし釜の如し、一所に二つ三つ重なり埋もれ」と記されている。2004 (平成16) 年、宮内庁書陵部の事前調査の結果、墳丘の第2段平坦面から、円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・鳥形埴輪が出土し、脚をもつ動物埴輪や

(国二年)日七月四年十三治明

第7図 平面図 (「丹波車塚の石棺」 『東京朝日新聞』)

家形埴輪の存在が推定されている。「蓋石図」には、後 円部頂の竪穴式石槨を取り囲むように埴輪列が描かれて いる。現在、確認する手段をもたない。

前述の宮内庁書陵部の事前調査によって、従来、2段 築成と思われていた段築が3段築成であることが明らか となった。各段における埴輪の樹立と石槨を囲む埴輪列 については、今後の課題である。

E. 竪穴式石槨

石槨の位置を描いた図は、「御陵墓参考地隍堀土堤築

工等之図」 註16や、1901 (明治34) 年4月7日付、『東京朝日新聞』第3788号「丹波車塚の石棺」 註17の中 に平面図 (第7図) がある。これらの図面により発掘地点は、後円部増頂、中央よりやや南に偏った位置 にある。また、栗林貞清氏が、「発掘したる石棺のありし所は、車塚の後丘の中央より僅かに南に、偏し たる所なり」

註18と述べていることも、それを証明するものであろう。この石槨位置について、末永雅雄 氏は、「この箇所を後円部の平面に対照すると北にもう一つの棺槨施設があると思われるから、二棺合葬 か室大墓メスリ山のごとく墓室の二室構造であろう」[末永1961]と推定している。

石槨内を描いた図は、『車塚一蒔』に「石棺・石槨図」(第12図)、「石棺図」、『御治定御願』に「蓋石図」、 「石槨ニ石棺ノ入リタル図 | (第58図)、「石棺之図 | (図版2)、「釼惣白石図 | (図版3-1)、「甲腐朽図 | (図版3-2)、八木の「丹波国多紀郡雲部村の古墳発見品」(以下「古墳発見品」) [八木1901] 註19に石棺、石 槨と石棺、刀掛と側壁、鉾と剣、を描いた図(以下「石槨遺物図I)(第8図)がある註20。

天井石を描いた図は、「石棺・石槨図」、「蓋石図」がある。図面には5枚の板石を描いているが『御陵 墓顛末記』には、天井石は7枚としている。天井石の大きさは、『車塚一蒔』には、畳二畳位と記してい る。「蓋石図」では、石槨東側の第1枚目の天井石が、丸木をかませて開けられ、長持形石棺の縄掛突起

が覗いている。

(円) を測る。

日十二月二十年四十三治明

第8図 「石槨遺物図」[八木1901]

石槨の規模は、「石棺・石槨図」、「石槨ニ石棺ノ入 リタル図」により、長さ、1 丈7尺3寸(約5.2m)、 市 5 尺 1 寸 (南北幅約1.5m)、深さ 4 尺 9 寸 (約1.5 m)

側壁は、「石棺・石槨図」、「釼惣白石図」、「甲腐朽 図」、「石槨遺物図」があり、割石をレンガ積みの如く 構築している。『三丹新聞』の記事「車塚の記」(以下 「車塚の記」) 註21には「四周には焼瓦の如き大小不同の 石を以て、正して石垣を積み、塗るに丹朱の如き赤色 のものを以て」と記す。

そして、「釼惣白石図」、「甲腐朽図」、「石槨遺物図」 には、四壁に刀掛のような釘が打ちつけられ、剣・ 刀・ホコなどの武器が掛けられている。八木氏は、 「古墳発見品」の中で、『神戸文新日報』「古墳発見」 (以下「古墳発見」) 註22と、『東京朝日新聞』の記事を掲 載して、地元から直接八木氏宛に届けられた情報と新聞記事が異なるのでと前書きして、「石槨遺物図」 の刀掛と側壁を描いた図を説明して、「四方には二行に四本宛の刀剣を懸け、鉄の折釘を以て支へたり」 と記述している。

石槨下面は、「石槨ニ石棺ノ入リタル図」、「石棺之図」、「釼惣白石図」、「甲腐朽図」に円礫が描かれ、「石棺之図」をみると、「石槨と石棺の間は白の玉石が一面に敷き詰めたり」と記している。下面全域に円礫が敷き詰められている。その円礫は、「車塚の記」には、「下低一面に布くに、白色の海石を以て」と記し、海石を敷き詰めていたと理解される。

F. 長持形石棺

長持形石棺を描いた図面は、「石棺・石槨図」、「石棺図」、「蓋石図」、「石槨ニ石棺ノ入リタル図」、「石棺之図」、「釼惣白石図」、「甲腐朽図」、「石槨遺物図」がある。

石棺は石槨中央に安置されており、組合式の長持形石棺である。その規模は石棺蓋石の長さ凡7尺2寸許(約2.1 m)、石棺東側の高さ凡2尺6寸許(約0.8 m)、西側の高さ凡3尺1寸許(約0.9 m)である。石棺は西に高く、東が低い。石棺は東面を正面として描いている。蓋石の上面は中高に盛り上がり、かまぼこ形を呈する。縄掛突起は短辺に2個、計4個、長辺の中央に1個、計2個、合計6個である。短側石には、方形突出部が東面する外面に1個、西面外面には2個あり、長側石には、縄掛突起が両端に2個、計4個ある。底石は下面に隠れ、図には表現されていない。「古墳発見」記事によると、「石棺の石蓋は此地方になき夫の泉石と称する青色なるものにしてその厚さ六寸位なり棺中の朱塗は甚だ厚し」と書かれている。

蓋石は、開けられることはなかった。

G. 副 葬 品

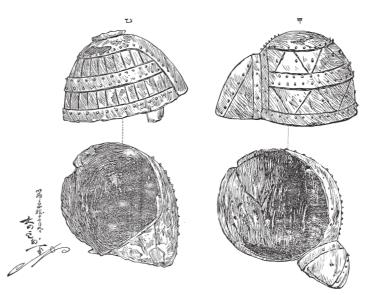
甲 **冑** 石槨内の甲冑を描いた図は、「石槨ニ石棺ノ入リタル図」、「釼惣白石図」、「甲腐朽図」の3 枚があり、個別の図に「ホゾン物類」の図、「槍・鉾・刀・剣・甲冑他図」、八木氏の報告〔八木1901〕に 大野雲外氏が描いた「冑図」^{註23} (第9図) がある。

「石槨ニ石棺ノ入リタル図」は、石槨内に長持形石棺が安置され、甲冑の位置が明記されている。「釼 惣白石図」、「甲腐朽図」は、甲冑が石槨の北東隅、北西隅、南西隅に立位で置かれていたことがわかる。

南東の隅には何も描かれていない。 北東隅、北西隅の甲冑は小口の側壁 に平行に、南西の甲冑は長側壁に平 行に置いているように描かれてい る。「車塚の記」によると、「(長持 形石棺の) 前後には甲冑各二領づつ 有り、只冑と胴の外小手脛當草摺様 のものは一つもなし」とあり、その 出土状態が復元される。

冑は4個出土している。そのうち、 2個が石槨に戻され、2個が京都帝 国大学に移された。

「釼惣白石図」には、石室北東隅



第9図 「胄図|[八木1901]

に甲2領および錣片、東面と北面の側壁には掛に掛けられた剣・刀・ホコが、またこれら側壁下面や、 南側壁下面にはホコなどが落下した状態が描かれている。

「甲腐朽図」は、北東隅には鎧と甲1領が明確に描かれ、南西隅には、甲冑2領以上が描かれている。 二方の側壁には刀掛があり、剣・刀・ホコが掛けられている。

石槨から出土した甲冑を描いた図には、「槍・鉾・刀・剣・甲冑他図 | 、「冑図 | がある。また、短甲は 左竪上板・押付板・後胴裾板が取り出された。

掛 「刀掛」、「折釘」と記された「鉤状鉄製品」は、「釵惣白石図」、「甲腐朽図」、「石槨遺物図」 に描かれている。1897 (明治30) 年6月19日「石槨内古器物ノ取調」(第3表) によると、「刀掛」として 石室外に2個が取り出された。これが、京都大学総合博物館に、「鉄具(折レ釘) 貳個 丹波国多紀郡雲 部村大字東本庄車塚発見」と墨書きされた板に留められ、保管されてきた〔京都大学総合博物館1997〕。

(3) 移置された遺物

車塚の出土遺物は、第3表「石槨内古器物ノ取調」のとおり、1897 (明治30) 年6月19日、保存する価 値のある遺物を石槨から取り出し、保存する遺物、石槨に戻す遺物に分類し、目録を作成、その後、後 者は再び石槨に戻された。取り出した遺物は、1901 (明治34) 年7月3日、京都帝国大学庶務課長中山親 和氏の立ち会いの上、京都帝国大学に移置された誰24。そのときの様子を、同年7月7日付、『神戸又新 日報』第5412号註25は以下のように記している。

「御陵参考地の発掘物、(略) 去る3日、同村に赴き、参考地及其他の古塚より発掘せし左(筆者註:下 記)の物品を京都へ持ち帰りたる由なり。

刀3口、剣4口、鎗袋穂2個、延柄鎗1本、兜2個、鎧断片12個、鏃大3・小6個、金環1個、鉄片 3個、折釘2個、以上参考地内の分、陶器2個、白小石赤土付着2個、埴輪破片2個、鉄環1個、以上 役場保管の分、陶器 3 個(大原彦兵衛蔵)、同 1 個(中森興衛蔵)、同 1 個、曲玉・小玉・管玉・切子玉21個 (木戸勇助蔵)、陶器破片14個、銀環1個、鉄輪1個(清水多兵衛蔵)、陶器破片17個(細見米蔵蔵)」と。

新聞の信憑性、車塚から搬出した遺物と京都帝国大学に搬入した遺物の整合は別にしても、車塚周辺 の古墳から出土した遺物もあわせて、移されたことと理解される。"今後の考証のため"として、石槨か ら取り出した出土遺物は、京都大学考古学資料第1号として保管され、かつ13枚の彩色絵図(図版4~7) に描かれ、残された。

(4) 車塚は何人の墓か

車塚の発掘へと導いた八木氏は、「古墳発見品」に「此古墳は石棺等の構造と云ひ、遺物の形状と云ひ、 共に類例少なき方にて、古墳時代の研究者に取りては、興味の津々たるを覚ゆるなり」[八木1901] と記 述している。考古学者として、この古墳の学術的価値をみぬき、後世にその研究を託しているように思 える。

5世紀代、丹波国、篠山に突如として築かれた、全国第59位、中期古墳では第29位誌26の巨大な古墳、 雲部車塚古墳を、遺跡・遺構・遺物から、"車塚は何人の墓か、皇族方の墓か、否か"を問いなおしてい かなければならない。 (池田正里)

〈註〉

1 『車塚関シ通達通知綴込』 1896 (明治29) 年 6 月から 1910 (明治43) 年 11 月。

福住分署『明治三一年 火葬場二関スル編冊』 1898 (明治31) 年。

『古墳参考書抜粋 甲』 1897 (明治30) 年6月から1900 (明治33) 年4月。

『古墳参考書抜粋 乙』 1900 (明治33) 年から 1903 (明治36) 年。

『御陵墓参考地監守人関係一蒔』 1901 (明治34) 年から 1906 (明治39) 年。

高家正一『車塚記』 1910 (明治43) 年1月。

「四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記」、「車塚」、「雲部村車塚二就イテ」、「車塚 雲部御陵墓参考地陵墓復旧工事 之記」、「兵庫縣多紀郡雲部村御陵墓参考地二関スル考證案」、「車塚比賣塚考證文」を所収。

木戸勇助『車塚一蒔』 1910 (明治43) 年 10 月 13 日。

多紀郡町村長『御陵墓参考地に関する請願書』 1935 (昭和10) 年5月。

多紀史蹟研究会(代表奥田常造(築々斎))『兵庫県多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願』写しを所収。

2 多紀郡町村長『御陵墓参考地に関する請願書』 1935 (昭和10) 年5月。

多紀史蹟研究会(代表奥田常造(楽々斎))『兵庫県多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願』写しを所収。

- 3 1900 (明治33) 年3月30日、『宮内省皇宮付属地御陵墓参考地』となる。
- 4 『車塚一蒔』、車塚の発掘を指揮し、陵墓参考地に至る行政の責任者であった村長、木戸勇助氏が、1896 (明治 29) 年 5 月14日より 1910 (明治43) 年10月13日までの間に、上級機関宛に出した伺書、請願書ほか、また受理した通達・通知等の公私文書などを書き写し、絵図面を含む一件書類の綴りである。この綴りを『車塚一蒔』と題して、本文 1 頁 12 行、美濃青罫紙 225 枚。現在篠山市の指定文化財となっている。
- 5 多紀史蹟研究会 (代表 奥田常造 (楽々斎))『兵庫県多紀郡雲部村御陵墓参考地御治定御願』。 多紀郡町村長『御陵墓参考地に関する請願書』 1935 (昭和10) 年 5 月に所収。
- 6 奈良正質·大田毎資(編)『篠山領地誌(一名貞享記)』 1687 (貞享4) 年。
- 7 永戸半兵衛貞著『丹波志』 1794 (寛政6) 年。
- 8 明治時代、車塚は、墳墓地、兵庫県多紀郡雲部村ノ内東本荘村字城山ノ坪、塚。陪塚い号は、墳墓地、東塚坪、塚。陪塚ろ号は、墳墓地、城山ノ坪、塚である。
- 9 木戸勇助『車塚一蒔』 1910 (明治43) 年10月13日。
- 10 波部本次郎氏は、明治維新後の変革期に、大郷長・大区長・県会議員・郡会議員、また百三十七銀行を創立して 頭取となるなど、政治・経済の面から多紀郡の産業育成に貢献した人物である。
- 11 八木奘三郎氏は、1866 (慶応2) 年11月5日、江戸青山北町に、篠山藩青山家江戸詰家臣の子として生まれる。 1894 (明治27) 年8月20日、第2回土俗會において、八木氏は「丹波篠山」と題して「私は元来東京生まれでござりますが維新の際両親が舊知事に従って、(略) 其領地なる丹波篠山へ引き込みまして数年間彼地で成長致し升た」と述べ、明治維新の際、旧藩主にしたがって両親が篠山に帰郷したため、幼少時代を篠山で過ごした。19歳のとき上京し、1891 (明治24) 年10月 (26歳)、東京帝国大学理科大学 (現・東京大学理学部) 人類学教室に「標本取扱」の名目で奉職した。坪井正五郎氏のもとで考古学を学び、草創期の日本考古学の確立に功労のあった一人である。

著書には、日本の考古学を最初に体系化した概術書『日本考古学(上・下巻)』明治31・32年、『考古学便覧』明治35年、『学生案内考古の栞』明治37年、『考古学研究法』明治38年、『考古精説』明治43年、『満州考古学』昭和3年など、啓蒙書が多い。そして『東京人類學會雑誌』などには夥しい数の論文を発表した。

八木氏 (31歳) は、1896 (明治29) 年 5 月、京都・大阪・丹波・河内をめぐる歴史時代研究の途中、篠山に帰郷した。1942 (昭和17) 年 6 月 17 日、東京都中野区雑色町 20 番地で死去。享年 77 歳。

- 12 木戸勇助氏は、1851 (嘉永4) 年7月16日、東本荘村に生まれる。1883(明治16)年7月、戸長に、続いて村長となった。在職中は、「東奔西走、席の暖るを知らず」と「多紀郷土史考」に記されるほど、車塚の保存のために全力を傾けた。『車塚一蒔』を著す。雲部小学校校庭に「木戸勇助君 頌徳碑」がある。1918 (大正7) 年8月26日死去。
- 13 車塚の主体部を掘り起こす意味で、「発掘」と旧稿 (池田1995) に記した。しかし、『車塚一蒔』の1896 (明治29) 年 5月20日付、木戸村長が多紀郡長宛に提出した「御伺書」では、「試掘」と記している。本節では「発掘」を使用 する。
- 14 「四道将軍丹波道主命之御陵墓顛末記 | 1908 (明治41) 年 6 月。

高家正一『車塚記』 1910 (明治43) 年1月に所収。雲部村役場に勤めていた高家正一氏が、木戸村長から車塚の顛末を聞き、書き記したもの。

15 諸陵寮京都出張所『明治36年工事録7』。

- 16 諸陵寮京都出張所『明治36年工事録7』。
- 17 「丹波車塚の石棺」『東京朝日新聞』第3788号、1897 (明治30)年4月7日。[末永1975] に所収。
- 18 栗林貞清「車塚の話 |。中山正二(編)『雲部御陵墓参考地―車塚研究資料集―』 1970 (昭和45) 年4月に所収。
- 19 石室側壁に刀などが2行に掛けてある「側壁図」は、学術雑誌にもっとも早く発表されたものである。
- 20 絵図面が多数あることから、掲載文献名と各図面を書いて論述することは、きわめて煩雑となる。そのため、本節においては文献名を省略し、各図面名を記述する。
- 21 「車塚の記」『三丹新聞』第33・34号、1900 (明治33) 年7月6・7日発行。『古墳参考書抜粋 乙』1900 (明治33) 年から1903 (明治36) 年に所収。
- 22 「古墳発見」『神戸又新日報』 1896 (明治29) 年5月24日。〔八木1901〕 に所収。
- 23 東京帝国大学理科大学の大野延太郎 (雲外) が胄図 (小札鋲留衝角付冑・三角板鋲留異形衝角付冑) を描いた。
- 24 京都大学保管『車塚一件書類』(20cm×29cm和綴)作成年月日不明。

移置された遺物の正面・側面・裏面を実物大に描いた記録絵図 (55cm×120 (1枚のみ235) cm)、和紙に彩色された図面13枚。麻生、中村と朱色で記載されている。

図面は、「ホコ・刀・剣・鏃・鉇」、「小札鋲留衝角付冑」、「小札鋲留衝角付冑・衝角付冑伏板」、「三角板鋲留異形衝角付冑」、「三角板鋲留異形衝角付冑・頸甲」、「馬具・板錣」、「板錣」、「三角板鋲留錣」、「不明鉄板・短甲竪上板・石」、「短甲押付板」、「短甲後胴裾板」、「刀・剣」、「剣・ホコ」である。

- 25 『古墳参考書抜粋 乙』 1900 (明治33) 年から1903 (明治36) 年。
- 26 車塚の墳丘長を158mに修正して、全国的な順位〔白石1999〕にあてはめた。

〈参考文献〉

池田正男 1995 「木戸勇助と雲部車塚古墳」『兵庫の歴史』第31号 兵庫県 pp.38-46

池田正男 2002 「何人カノ筆ニ成ル雲部車塚古墳」 『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号 兵庫県教育委員会埋蔵文 化財調査事務所 pp.43-68

京都大学総合博物館 1997 『王者の武装―5世紀の金工技術―』京都大学総合博物館春季企画展展示図録 京都大学総合博物館 学総合博物館

白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権 古代国家はいかに形成されたか』文春新書036 文藝春秋

末永雅雄 1961 『日本の古墳』 朝日新聞社

末永雅雄 1975 『古墳の航空大観』 学生社

徳田誠志・有馬 伸・加藤一郎 2006「雲部陵墓参考地墳塋裾護岸その他工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第57号 宮内庁書陵部 pp.29-61

八木奘三郎 1901「丹波國多紀郡雲部村の古墳發見品」『東京人類學會雑誌』第17巻第189号 東京人類学会 pp.93-98